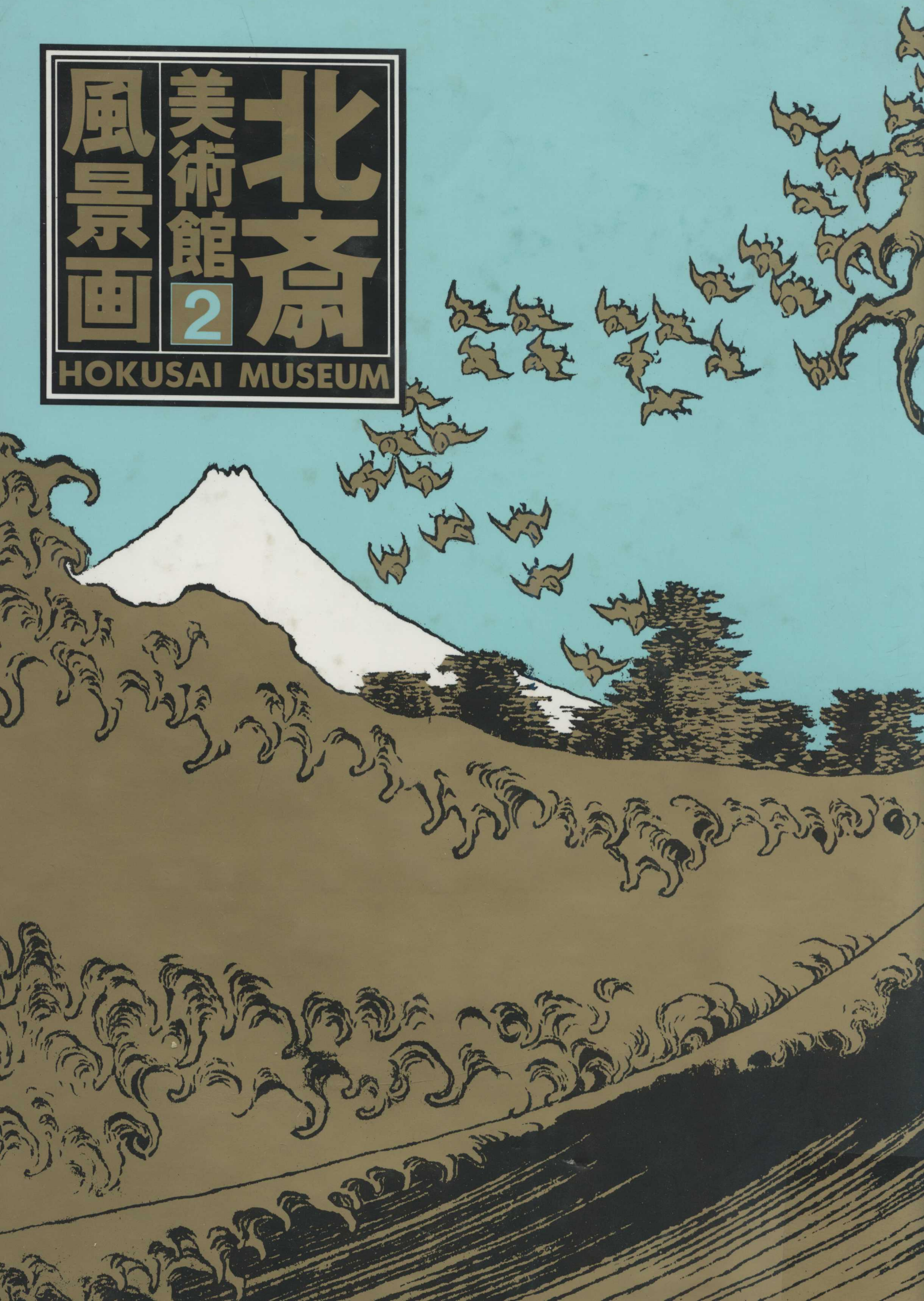


北斎
美術館
2
風景画

HOKUSAI MUSEUM





北斎美術館(全5巻)第2巻 風景画

一九九〇年五月三〇日 第一刷発行
一九九九年五月一九日 第六刷発行

監修・執筆 ながたせいじ 永田生慈

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二丁目五番一〇号
郵便番号 一〇一八〇五〇

電話 編集部(〇三)三三三〇局六一四一番
販売部(〇三)三三三〇局六三九三番
制作部(〇三)三三三〇局六〇八〇番

印刷所 日本写真印刷株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

用紙 三菱製紙株式会社

北越製紙株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

北齋美術館

全5卷 2 風景画

HOKUSAI MUSEUM

江苏工业学院图书馆
藏书章

発行 ● 集英社

監修・執筆 ● 永田生慈

北斎美術館

第2卷 風景画

目次

カラー図版

富士

5

富嶽三十六景

21

雲

22

水

32

波

38

視角

47

空間

62

東海道五十三次

69

2色図版

富嶽百景(初編)

101

(二編)

111

(三編)

122

北斎博物誌(職業・風俗編)

133

対談 ● 加山又造×永田生慈

北斎の波は $\frac{1}{5000}$ 秒

141

文 ● 永田生慈

葛飾北斎 — その多彩な画業(後編)

149

逸話にみる北斎の人間像

154

収録作品リスト

157

表紙表「東海道五十三次」京(部分図・葛飾北斎美術館蔵)／表紙裏「富嶽三十六景」本所立川(部分図・日本浮世絵博物館蔵)



図版協力（敬称略・五〇音順）

アムステルダム王立美術館
MOA美術館
太田記念美術館
葛飾北斎美術館
神奈川県立博物館
梶島家
加山家
国立国会図書館
佐野美術館
サンフランシスコ美術館
シカゴ美術館
誓教寺

チェスター・ビーティ美術館
千代田スタジオ

東京国立博物館
東京都墨田区
日本浮世絵博物館
ハーバード大学
日枝神社
ビーター・モース・コレクション
北斎館
ミウラスタジオ
向山家
メトロポリタン美術館
ヤン・プール家

編集協力

株式会社 安達美術

装幀・レイアウト

榎本了彦／アタマ・インターナショナル

（所蔵者の表示は公共機関に限った）

凡例

一、本巻は『北斎美術館（全5巻）』の第2巻として、葛飾北斎の作品の内、富士、東海道五十三次を題材とする、肉筆画、版画、摺物、絵半切、版本挿絵を扱った。なお、『富士三十六景』『東海道五十三次』『富嶽百景』は、鑑賞の便宜を図って全点紹介した。

一、図版96より始まる「東海道五十三次」は、鑑賞の便を図り、現在の地名で宿駅名を記したが、府中（静岡）、鳴海（名古屋）は旧地名をそのまま記した。また、同一地名に数点の図版を掲載したので、混乱を避けるため、特例として図版にも作品番号を付した。

一、北斎作品を立体的に鑑賞するべく、絵手本挿絵等から、関連作品を適宜抜粋し、カラ

一 図版に併載した。

一、カラー図版・2色図版のデータで、作品の寸法は、肉筆画・摺物はタテ×ヨコをcmで、版画は綿絵の判型（下表）によって表示した。なお、データで（部分図）と表示したものは、肉筆画は原寸または拡大、版画はおおむね原寸とした。

一、図版データおよび対談・本文解説において、書名は『』により表示した。また、対談・本文解説で作品名は「」により表示した。

一、対談および本文解説中で、カラー図版・2色図版について触れた場合は、作品番号を下のように付記した（図版15）。

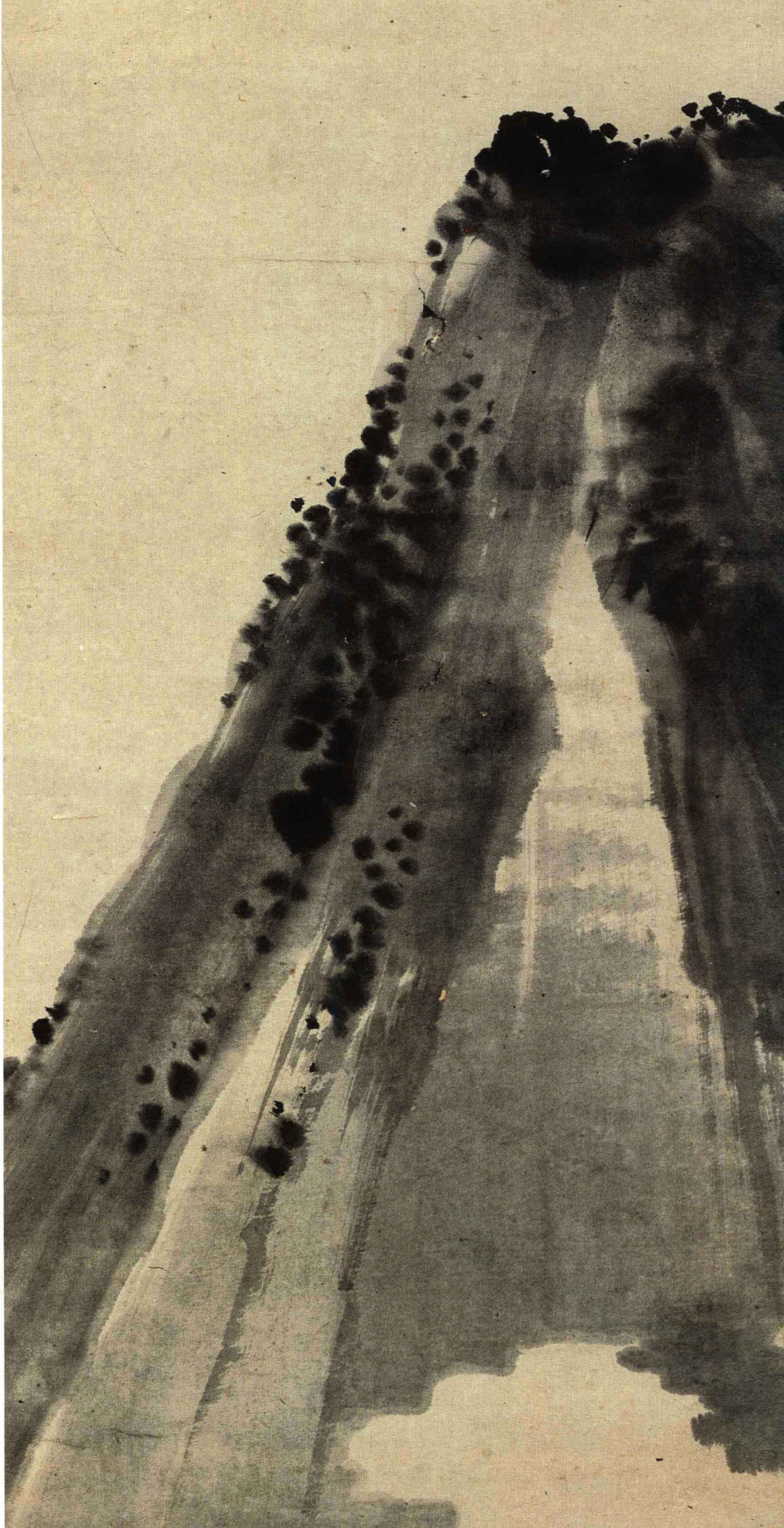
一、巻末の収録作品リストは、北斎研究の国際的現状を考慮し、英文を併記した。

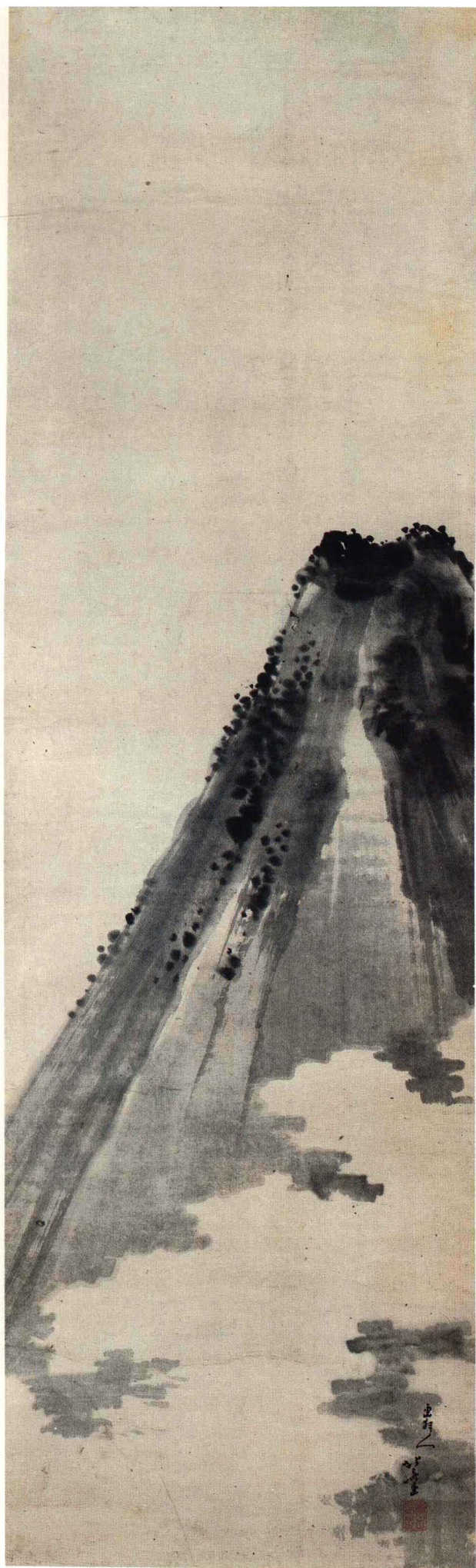
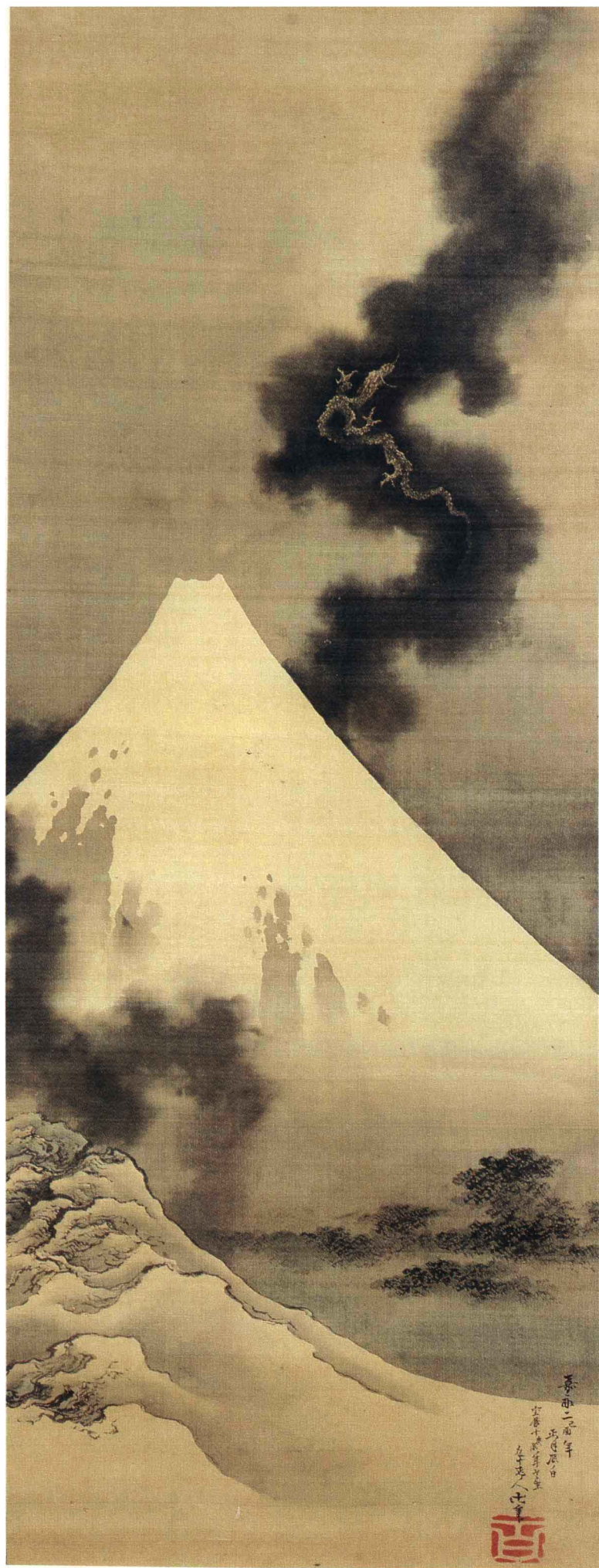
版画（錦絵）の寸法

判 型	サイズ(cm)
大大判	75.7×45.4
大 判	39.3×26.3
間 判	33.3×22.7
中 判	29.3×19.0
小 判	中判より小型判の総称
細 判	30.3×15.1
柱絵判	66.7×12.1

富士

北斎といえど、誰もが富士を想起するほど、「富嶽三十六景」のシリーズは著名であり、風景版画の傑作として人びとに広く知れわたっている。簡潔な配色、大胆な構図、そして強烈なまでの個性表現など、古くから高い評価が世界中で下されてきた。だが北斎の風景画は、このシリーズに限らずとも、大半が一つの主題を徹底的に観察分析し、季節に伴う自然環境を把握して、精神的な雄大さをも充分に表出している。ここに、他の絵師とは異なる作画への真摯な姿勢が窺え、またそれが大きな魅力ともなっている。





2 富士 紙本墨画 一幅
九五・〇×二九・〇 cm 日本浮世絵博物館

細長い画面であるためか、極端に切り立った象徴的な富士図である。おそらく雪のないことから夏の景であろうが、濃墨による点苔（東洋画で岩石・樹皮などに点すために打点）が季節感を十分に伝え、大胆な描法を示す点では、文化年間初期の随一のものであろう。なお、画中全体に横筋が見出せるのは、直接畳の上で描いたためと思われるので、席画（客の注文に応じて、客の注文に応じて描く絵）であつたという可能性も考えられる。

3 富士越の龍 絹本淡彩 一幅
九五・五×三六・二 cm 北斎館

近年まで、空襲で消失したと考えられていた作品である。落款には、嘉永二（四年正月辰ノ日辰ノ日は、十一日か二十三日のいずれかである）とあることから、極めて絶筆に近い制作として、注目されていたのであつた。雄大な富士に、黒雲と共に龍が昇天するという、出世を意味した目出度い図柄であるが、墨絵であるからというだけでなく、枯れた筆致をみせているのは、あるいは老境の故からであろうか。



4 大龍巻 絹本淡彩 一幅 一二三・〇×三三・〇 cm 北斎館

龍巻の大渦の中から、天空を望んでいる。渦中には、やや黒い電（いなづま）のようなものも見られ、空恐ろしい自然現象の力強さと、限りなく広大な空間に、一見して無条件で圧倒されてしまう。果して北斎の前にも、また後にも、このような作品を制作し得た画人があつたのだろうか。絵に描けぬ事を捉えようとする、北斎の作画の気概が、ひしひしと迫り来る傑作中の傑作というべきであろう。北斎風景画に、一貫して描き込められている季節や自然現象は、まさに本図にみられるような鋭い感性と、観察眼によるものと思われてならない。



まゝ肌中 ちね 深〜
ちうふ 雲中 研 ぬ 洗 ぬ
ちね ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

あ
は
き
に

山
し
た
る
松
う
風

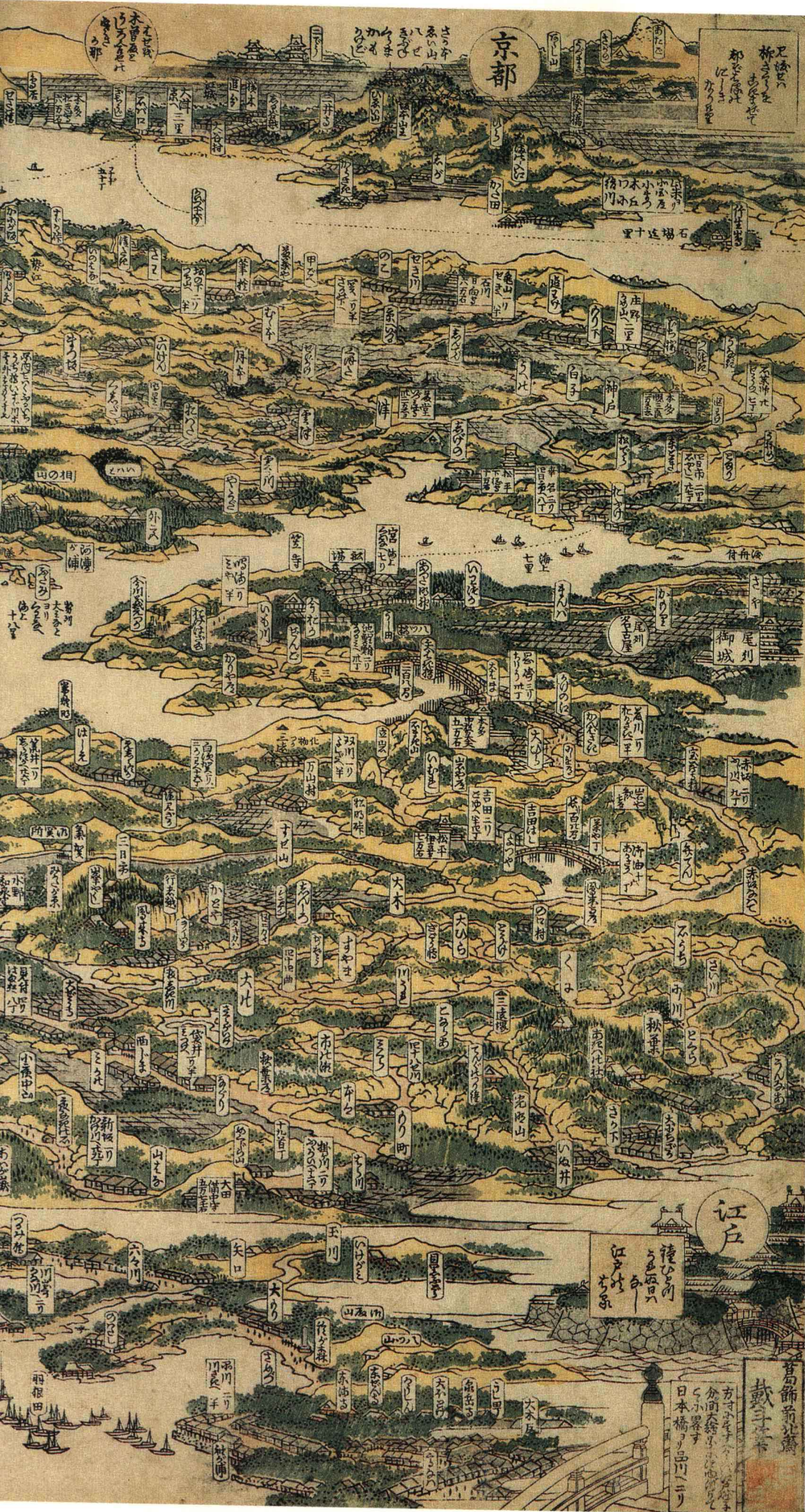
七十光

ふ
く
木
花



松の老木越しに富嶽を遠望するという、極めて斬新で後年の
北斎好みの一図である。落款等から、おそらく宗理号を廃し
た直後の四十歳代前半の制作とみられるが、幹は毛足の強い
筆を用いて一氣に描き、濃墨や朱を施して質感を強調してい

る。また一部たらし込(色を塗って乾かぬうちに他の色をたらしこむ技法)風な部
分もみられ、諸派の画法を混用したところが充分に窺えて、興
味ぶかい作品となっている。



6 東海道名所一覽袋 版画 哲教寺
7 東海道名所一覽 版画 大大判 哲教寺

大大判の北斎鳥瞰図は、当時よほどの人気があったらしく、現在六種類が確認されている。この図は、東海道の各宿場と名所を一枚にまとめたものであるが、デフォルメされて描かれているために、地図としての使用にはあまり役立たなかつたものと思われる。なお本図には、めずらしく発売当初の袋が一緒に残されていて、北斎描く燕と雁の縁どりに東海道名所一覽と正式な表題があり、また文政戊寅新鑄(文政元年)の版行であったことも知られている。





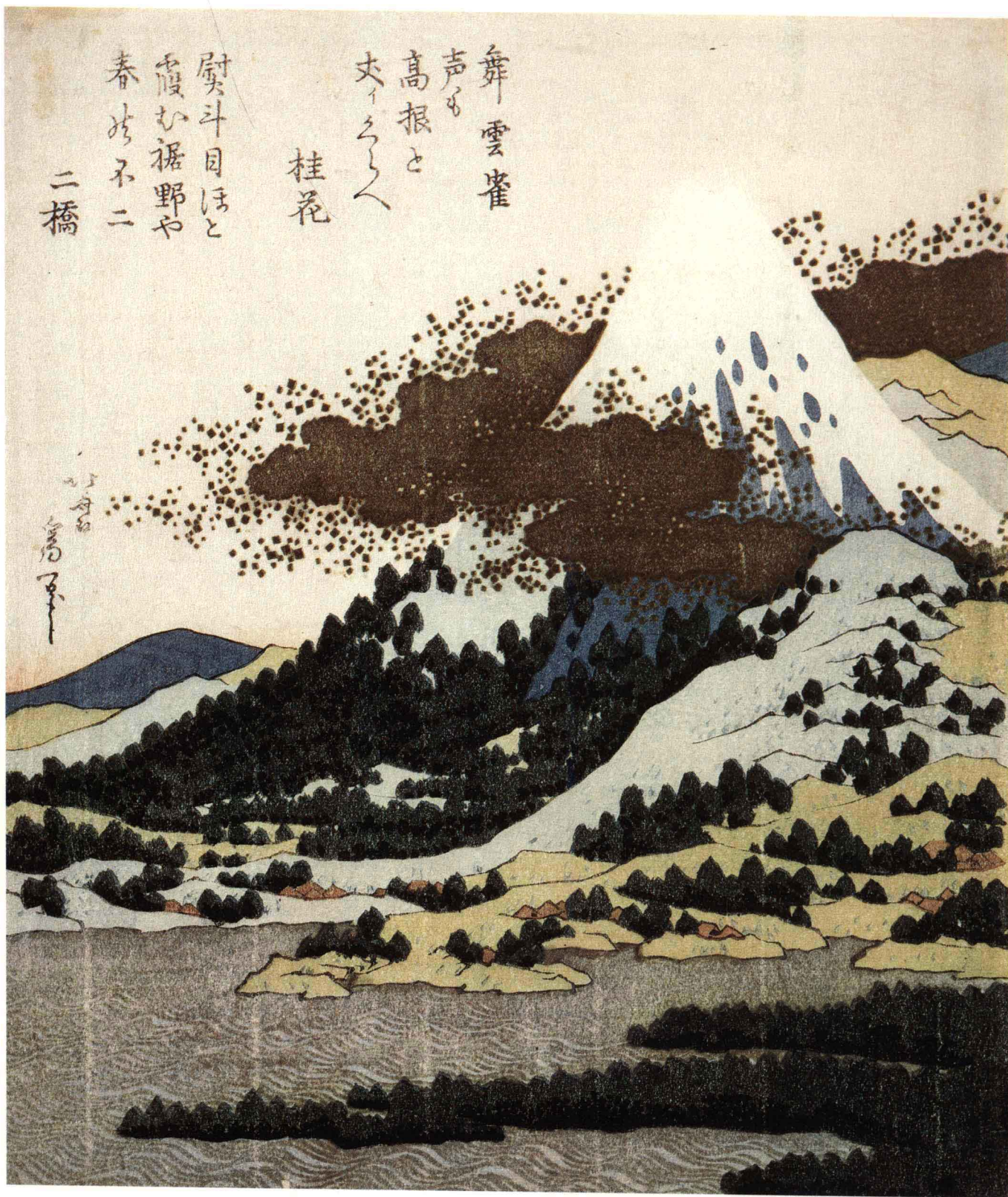
8 富士 紙本墨画 扇面 太田記念美術館

おそらく、席画での制作であろう。後年の富士図のように、やや尖った山容をみせている。制作年は、大田覃(蜀山人)の着讃に、庚申夏日とあることから、寛政十二年(一八〇〇)の夏頃と推定され、北斎はかぞえ四十一歳であった。すでにこの頃には、用墨の妙を心得、練達した筆致を示していることに、今更ながら驚かされるばかりである。なお、本図には画狂人北斎と署名しているが、従来この号は、翌享和元年(一八〇一)から用いはじめたとされていたもので、使用年は一年くり上げねばならないこととなる。

9 盆景を造る娘 摺物 二・五×一八・三cm

チエスター・ビーティ図書館

文政六年(一八二三)の初春に配られた摺物といわれる。盆景で、一心に富士山を造る娘が描かれているが、その面貌や仕種には、どことなく艶やかさが漂っている。しかし、笑みをたたえた表情や細やかな指の動きには、高貴な雰囲気も感ぜられ、摺物独特な淡い色調とも相俟つて、全体的に格調の高さが察知されよう。



舞雲雀
声も
高振と
丈くくく
桂花
慰斗目ほと
霞む裾野や
春水不二
二橋

10 箱根芦ノ湖の富士(原寸)

摺物 二二・〇×一八・一cm
チエスター・ビレー図書館

文政(二八・一八・三〇)末頃から、天保(一八三〇〜四四)年間にかけて、出版された中判の摺物には、超豪華なものが多い。この図も、まさにその典型といえる。富士は輪郭線を用いない凹凸の、カラ摺で表現され、立体的な効果を充分にあげている。また雲や砂子部分は金摺となっており、湖面は銀摺が駆使されて、見事という他ない。遺存する北斎の木版富士図中で、最も豪華な作品のひとつと見なせるものであろう。



この絵馬は、北斎が文化三年（一八〇六）に上総へ旅行した折、長須賀村名主の水野清右衛門宅に逗留して制作したものである。画面は、建久四年（一九三）に源頼朝が行った富士裾野の巻狩の様子であるが、主題は仁田四郎の猪退治となっている。後年の『富嶽百景』二編には、ほぼ同工の図「武邊の不二」（図版330）が収められていて、比較すると興味ぶかいものがある。また、文政元年（一八一八）春に刊行された絵手本『北斎画鏡』では、四郎が猪に乗り、短刀で刺そうとしていて、絵馬を二、『北斎画鏡』を二、『富嶽百景』を三番目に連続して見てゆくと、偶然ではあるが、場面がミ割りのように連続して面白く、ちなみに、絵馬の猪の顔面が極端に剥落しているのは、村の青年が、爛々と光る目を不気味に思い、竹箒で擦り落したためと伝え聞いている。

11 富士の巻狩 絵馬 一面 一三九三×一八〇・四 cm
日枝神社





- 13 さむたらかすみ 狂歌絵本 ビーター・モース・コレクション
富士が大きく望める峠の茶屋であらう。和らいた配色が初春の雰囲気を与えているが、轆轤を回す婦人の姿態に動きがあつて、軽やかな生彩さが感じられる。
- 14 不式峰圖 版画 大判 東京国立博物館
北斎は、宗理時代から摺物の名手と評され、多量の作品を発表している。そのような北斎摺物の人気に当て込んで、通常とは異なつた、淡い色調の摺物的な一枚絵が版行されており、本図はその典型的な一例である。